

街路空間デザインと 公的討議に関する一考察

大山 雄己¹・羽藤 英二²

¹学生非会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:oyama@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 教授
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp)

街路空間には沿道住民、地権者、商店主、訪れる者などさまざまな立場のそれぞれの事情が存在する。松山市の中心市街地に位置する花園町通りでも歩行者を主体とした道路空間再配分の計画が立てられている。本稿ではさまざまな立場の参加者の間で行われる公的討議から抽出される意見の構造と、それを汲み取ったデザインがいかなるものかを考察する。

キーワード :街路空間デザイン, ワークショップ, 市民参加

1. 研究の背景と目的

日本の都市における基盤整備は、人口増加がピークを迎え縮退へと向かう中で、その規模を縮小しつつある。一方で少子高齢化に拍車がかかり、交通量の減少、空き家の増加が認識されるようになると同時に、都市空間のコンバージョンや小規模な更新の需要が高まってきている。整備自体が目的となった都市施設は箱物と揶揄され、公共政策には市民参加が珍しくなくなった。その範疇はまちづくり¹⁾から景観計画、公共施設整備へと広がりを見せている。同時に市民参加を主題とした多くの論文・論説が発表されるようになり、近年では市民参加のプロセスやプレイヤーの関係性に着目した研究もなされている。片岡ら(2010)²⁾は近江八幡市における地域づくりの中で、市民活動の展開に着目し、構成員と活動プロセスの変遷、行政との連携について分析し、初期の活動が基礎となって継承され、新たな活動を生み出しているサイクルを明らかにした。しかし公共政策の多くは、失敗すれば財政の無駄遣いとして批判されるものの、参加する市民にとって直接的な損失を与えるものではない。今後急激な縮退を迎える日本の都市においては、より生活に密接した公共空間の質が重要であり、将来を見据えて現状の暮らしと引き換えにした都市空間整備も必要性を増してくると予想される。

愛媛県松山市でも今日の社会経済状況を受け、コンパクトで質の高い都市を目標に掲げた市民と一体のまちづくりが進められている。これまでにロープウェイ通り、

道後温泉周辺と整備がなされており、現在は松山市駅前から延びる花園町通りの道路空間再配分の計画が進行中である。歩道には自転車が駐められ、副道で荷捌きや送迎が行われるなど道路の私的利用が多く見られる。将来の超高齢化に伴う交通事故の発生、遅い交通を主体とした都市ビジョンを見据えた計画と現在の利便性とはどのように折り合いをつけられるべきなのであろうか。本稿では空間改変事業のプロセスを検証することで更新を続けてきた整備案の特徴を考察する。またWSにおける議論の過程を参加者の立場の違いに着目して検証することで、公共空間の設計において重要な役割を果たす公的討議のあり方に対する指針を得ることを目的とする。

2. 事業の概要

(1)松山市が掲げる都市戦略

松山市では、平成12年に中心市街地を対象として「歩いて暮らせるまちづくり」構想を策定し、歴史を活かした観光都市を目標に住民参加の「坂の上の雲のまちづくり」を進めている³⁾。集約型都市を目標とする中で都心居住、公共交通推進とともに既存の道路空間を見直し、適切な形で再配分して歩行者や自転車の空間を拡大していく方針が取られている。松山最大の商店街である大街道に隣接し、松山城へのエントランスでもあるロープウェイ通りでは、もともと2車線であった幅員12mの道路を1車線化し、歩道を両側3.5mずつ確保した。それに伴い電線の地中化や景観整備を行なったことで歩行者



図-1 花園町通り位置図



図-2 花園町通りの断面図および現状の使い方

の増加，商店街の活性化へとつながった。有史以来の歴史的な観光資源である道後温泉周辺においては，歩行者と自動車が交錯する状況を，車道の付け替えや一方通行化を行うことで安全な歩行者空間へと転化させることに成功した。以上の流れの中で，昨年度より松山市が取り組んでいるのが「花園町通り」の空間改変事業である。

(2)対象地

対象地である花園町通りは，松山市の中心市街地に位置し，松山最大の交通結節点である松山市駅と城山公園を結ぶ公共交通からもアクセス性の高い道路である（図-1）。幅員37m，延長約400m。中央には路面電車が走り，片側2車線に加えて植樹帯，及び副道と呼ばれる側道を持つ（図-2）。立地，規模ともに高いポテンシャルを持ち，かつては市駅から松山城下の堀之内公園へ

向かう歩行者で賑わいを見せていたものの，モータリゼーションの進展と堀之内の公共施設の相次ぐ移転により次第に衰退した。現在も東側には古くからの商店が軒を連ねるが空き店舗も増加し，西側はマンションや専門学校など複数が統合されて再開発された建物が目立つ。また，急激な高齢化に加えて，対象地の自動車交通量は30年前に比べて半減するなど減少の一途をたどっており，適切な道路空間再配分が求められている。市駅に近くアーケードが設置されていることもあり，通りは多数の違法駐輪であふれ，対処できずにいる。道路空間は副道において住民や店舗の私的利用が見られるなど，沿道の建築と密接に結びついている（図-2）。

(2)事業のフロー

全体の組織図を図-3に示す。松山市全体の都市ビジョ

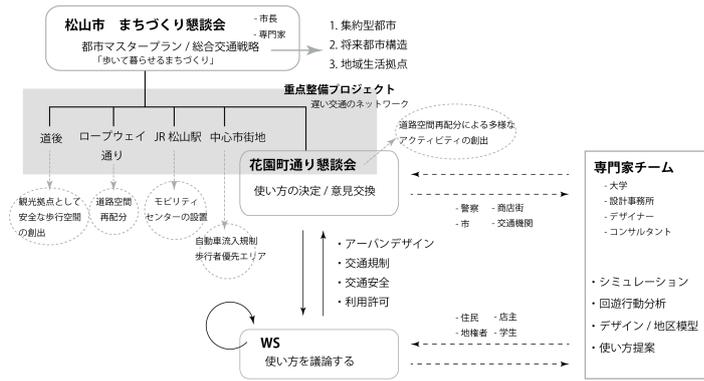


図3 事業の組織図と関係性



図4 WSの様子

ンは市長をリーダーとする「まちづくり懇談会」により議論がなされ、都市マスタープラン、総合交通戦略などの策定が行われる。各地区のデザインはその中の重点整備プロジェクトとして位置づけられる。花園町通りの空間改変事業もその中核を担う。さらに今年4月からは、月1回のペースで花園町通り空間改変事業懇談会が開かれ、市、警察、専門家、商店街役員、交通事業者、市駅前役員の間で使い方に関する決定協議が行われる。それと並行して地元住民を中心としたワークショップ（以降WS）が、同様に月1回のペースで開催され（図-4）、将来、そして社会実験時の街路空間使い方について議論、意見の交換がなされる。WSはより多くの住民に参加してもらうため、昼の部（15:00～）と夜の部（19:00～）の2部制で行う。専門家チームは懇談会、WSで得られた意見を元に整備検討案、社会実験案、シミュレーション等を提示する。このプロセスを繰り返すことにより、住民の事業に対する理解・関心を深め、案を更新していく。なお、これらの内容は特設サイトによってウェブ上でまとめられており、自由に閲覧することができる³。

3. 事業のプロセス

花園町において、社会実験に対する合意が得られ、2012年10月25日から同年11月4日までの約2週間の期間で実際に社会実験を行うことが正式に決定した。本章では、それまでの過程を主に専門家チームの案の更新とWSでの議論・意見の変化に着目し、時系列を追ってその内容を考察する。

WSが開始された2012年4月から現在（同年9月）までの、事業の過程を図-5に示す。実線で示した矢印は、専門家チームの案や分析結果、住民の意見の相互の働きかけを表し、破線で示した矢印はそれぞれの項目の更新、変化を示している。

(1) 社会実験までの経緯

当初、花園町通りの空間改変事業は前述のように、現在の利便性を失うことを恐れる住民からの不安の声が多く存在した。それに対して、懇談会、WSを月1回のペースで行うことで、市民の意見を積極的に集めて専門家チームは案の練り直し、論理の構築を行なった。WSを昼、夜と繰り返すことで次第に社会実験に対する議論が活発になり、自らがイベントを行いたいという意見もできるようになった。商店街の次の担い手である若手の積極的な意見を受け、専門家チームは組織図の作成やプログラムの検討をし、反対していた地権者や住民の方々も社会実験を通して判断したいという前向きな姿勢へと変わっていった。

(2) 静的なデザインから動的なデザインへ

デザイン案で大きな変曲点となったのは、図-5中における7月の整備検討案#5である。それまで、歩道を拡幅してデッキや芝生を設えることで、食事や佇みといった滞留や、社会実験時のイベントの場として活用するといったように、場所やアクティビティがある程度限定されたものであった。長い間車を中心とした生活を送ってきた地元住民にとって、いわばよそものともいえる専門家の考える街路の使い方はなかなか理解し難い場合も多い。これに対して案#5では住民からの要望でもあった、街路断面のフラット化を通り全体で行うことで歩道と車道間に存在した境界をなくし、現在の交通機能を保持したまま豊かな使い方が可能な「基盤」を用意した。合意の取れたところから沿道建築と一体となったアクティビティを挿入することで、社会実験などを通して豊かな街路空間をイメージさせるなど、変化への抵抗が大きい住民に対して、時間をかけてデザインを動的に見せていく方向へとシフトしたといえよう。ここでは、事業に対して積極的な若い世代に主体的役割を担わせて社会実験を行うことで、反対する住民に対して良い影響を与え、

意識の変化を促すことが期待される。

4. 公的討議の検証

以上からわかるように、社会実験の運用組織の形成や整備計画の更新、はたまた合意形成の場としてWSが果たしている役割は大きい。逆に言えば街路のような住民の生活と密接に結びついた公共空間の設計において、公的討議の質を高めることは事業をすすめる上で重要な事項であると言える。

本章では、デザイン案や社会実験の運用上で特に影響の大きかったと考えられる第2回WS（6月27日）で録音された音声データを元に、討議内容の検証を行う。分析に使用したデータは昼の部、夜の部の各1班ずつで、ファシリテーターは同一人物である。

(1)キーワード：昼夜の比較

まず、WSにおけるグループごとの議論の特徴を把握するために、テキストマイニングのフリーソフトウェアであるKH Coderを用いてキーワードの抽出を行なったところ、昼の部では出現回数の多い上位3語は飲食（22回）、作る（18回）、テーブル（12回）であったのに対し、夜の部ではイベント（25回）、観光（17回）、副道（13回）となっている。どちらも社会実験の内容を主として議論が進められていることがわかるが、昼の部では一度も出現しなかった「副道」が夜の部では3位に入っている。これは参加住民の個人属性による影響が大きいと考えられる。昼の部では、夜に仕事がある居酒屋経営の男性が積極的に発言をしていることから、「飲食」が最も出現回数の高いキーワードとなった。一方夜の部にも、市駅前で食品販売を行う参加者が出席していたが、花園町通りの地権者の男性も出席していたため、整備検討案に対する議論も活発に行われたと考えられる。

(2)話題の変遷：個人間の相互作用

次に、昼の部、夜の部における話題の変遷を図-6に示す。グループ内で他者の意見を受けて議論の展開する様子を把握するため、およそ1分ごとにキーワードを抽出し、発言者の属性とともに記述した。破線は話題の流れを示し、細い実線は語同士の関連を表す。

a)昼の部

全体として、花園町通りに居酒屋を営むA氏が積極的に発言している。A氏は社会実験を現実的に捉え、自らが進んで関与するという意欲的な姿勢を見せている。通りで商店を営むB氏も事業に対して積極的に関わってきており、議論での発言も多い。ここでは社会実験時のイベントが飲食のみになってしまうことを危惧し、飲食

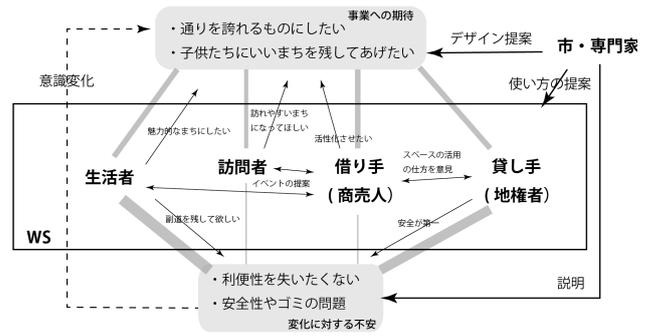


図-7 WSでの参加者間の働きかけ

以外の物販などを提案するが、A氏とFC（ファシリテーター）が飲食系のイベントに関する話題で盛り上がりを見せたため、なかなか話題が転換しなかった。しかし飲食系のチームリーダーがC氏に決定して話題が一区切りし、またそれまで発言のなかった専門学校講師のD氏に対して話を振ったことで、学生の協力を得るなどといったさまざまな社会実験のプログラムへと議論が展開していった。

b)夜の部

最初から社会実験のプログラムについて議論が進められた昼の部に対して、夜の部ではまず整備検討案に対する意見が述べられている。E氏は花園町通りで土地を所有する地権者であり、住人の立場として利便性と安全性が失われるのではないかとという危惧を抱いている。そのため、討議の中で度々「副道」「規制」といったキーワードが出現する。途中でFC（ファシリテーター）が社会実験の内容へと話題を変えたことをきっかけに、イベントの核、ターゲットといった内容へと議論が展開した。市駅前でも食品販売するG氏とH氏は、自身の商売経験を元に意見を述べた。また花園町周辺ではないが松山市に在住するI氏は、観光をメインとして案内所等を設けたらどうかという提案を行い、地元の大学生であるJ氏もサークル活動と関連したイベントの可能性などを述べた。これらの発言は明らかに参加者の立場に起因しており、お互いの価値観に影響を与えているといえよう。

5. まとめ

事業に関連する組織間の関係性をプロセスとして整理することで、街路空間のデザインの発展経緯を明らかにするとともに、その特徴を述べた。

街路空間には、地権者、地元住民、商店主、次の担い手、学生などさまざまな立場の人のそれぞれの事情が存在する。WSでの対話分析を行なった結果この花園町通りでも、昼の部と夜の部ではキーワード、話題の変遷と

もに大きな違いが見られるなど、立場の違いによる意見の差異が明らかとなった。さらに、同じの班の中でも違った立場の参加者の意見を聞くことで価値観の更新や固定観念の解消が起こり、参加者の間で相互作用が生まれていることに気づく。図-7に示すように反対する住民は変化に対する不安が大きいのであり、まちを良い状態にして将来へ渡したい思いは他の参加者と同じである場合が多く、若者や訪れる人の意見に耳を傾け、同意する様子もWSの中では見られた。これより公的討議の設計のためには、発言の多少だけでなく、立場や年齢などを踏まえて参加者間の相互作用までを考慮に入れる必要があることが示唆された。

これらの結果は今後の公共空間の設計プロセスに一つの方針を与えるものといえよう。本稿では1つのプロジェクトを対象にして研究を行なったが、複数のプロジェクトに関して比較検証を行い、デザインの構造を整理することでより有益な知見が得られることも考えられる。また、公的討議の検証に関しても異なる立場間での参加者の相互作用を検証するために、実験的に組み合わせを変化させるなど、より深い考察が必要であると考えられ、今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 片岡由香, 出村嘉史, 山口敬太, 川崎雅史: 官民協働の地域づくりにおける市民の自律的役割と活動の継続性に関する研究 近江八幡市を事例として, 景観・デザイン研究講演集 No.6, pp.212-218, 2010.
- 2) 石井朋紀: まちづくり交通計画～愛媛県松山市～, 松山市都市政策課, 2009.
- 3) 花園町通り空間改変事業 ポータルサイト: <http://hanazonomachi.jp>
- 4) 佐々木邦明, 丸石浩一: テキストマイニングを用いたワークショップの討議内容の特徴把握と可視化に関する研究, 都市計画論文集, Vol.46, No.3, 2011.
- 5) 野末遥, 亀田真宏, 羽藤英二: 紐帯の質的広がりに着目した場のデザインと評価に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.7, pp.246-253, 2011.